

内側から見た JNTO のイストワール⑩

石井昭夫（元 JNTO 理事、
元立教大学観光学部教授

丸 5 年間スイスで暮らしたことは自分のものを見る目に大きな影響をもたらしました。今にして思えば、スイス駐在が後の私をつくってくれたのかもしれませんが。以下ジュネーブで学んだこと、考えたことの一端を記してみます。といっても、ジュネーブでの経験や学びを起点にして、その後あれこれ考えたり学んだりして得た知見を含んでいるのはもちろんです。

自然観光を産んだ国スイス

まず、観光国スイスについて。ツェルマットとマッターホルン、グリンデルワルトとユングフラウ、それにフランス領ながらジュネーブが起点となるシャモニーとモンブラン…。スイスとフランスの山岳地方には在勤中何度も訪れました。

スイスの自然観光の歴史は学ぶほどに驚きと発見がありました。キリスト教の教義では、手つかずの自然は神の恵みから遠く、とくに山は野生のままで悪魔や野獣の棲む怖い場所でした。後に知ったことですが、長らくヨーロッパには名前のある山が少なく、18 世紀初頭のヨーロッパの教養人が名前を挙げることができた山は、古代ギリシャのオリンポス山、ノアの方舟のアラト山、モーゼが十戒を得たシナイ山くらいで、下って 13 世紀にアラゴン王ペドロ 3 世が登って知られるカニグー山、ペトラルカが登ったヴァントゥー山くらいだったそうです。

貴族観光の時代、目的地は古代ローマの遺跡とルネサンスのイタリア、そしてイタリアに準ずる南部フランスとパリでした。アルプス山岳や田舎の山道は英国人や北方の貴人がイタリア詣でをするのに通らざるを得ない障害でしかありませんでした。その観念を逆転させたのがジュネーブの人ジャン・ジャック・ルソー

（1712～78）です。ヨーロッパ人はいつ、どのようにして自然を美しいと感じ、鑑賞するようになったのか。史書も文学書も「自ら自然の中で育ち、自然に親しんだルソーによってである」としています。ルソーは意図的に自然を楽しむために徒歩で旅をした最初の人でした。レマン湖西端のジュネーブで生まれ、豊かな自然の中を歩き回りまわりました。プレ・アルプスの山岳美と湖水美豊かなレマン湖の周辺を舞台にした彼の小説「新エロイズ」（1761 年）は、都市と都市文化にしか興味を持たなかったそれ以前のヨーロッパ人を劇的に田舎や自然豊かな環境に誘い込んだのでした。「新エロイズ」はヨーロッパ諸国で 18 世紀最大のベストセラーとなり、大勢の旅行者が小説ゆかりの地を求めて〈ルソーのスイス〉を訪れ、スイス詣での始まりとなったのでした。

それでもまだ森や山そのものは完全に無視されて恐怖の対象でありつづけ、風景を愛でるようになって、人間の手の入らぬ野生の自然は関心の対象外でした。深山幽谷は人間の修業の場、隠棲の地でもある日本の自然観との相違が深く印象に残りました。18 世紀最後の四半世紀になって、ようやく西欧でも恐怖の対象だった山岳への接近と挑戦が始まります。

アルプス登山の始まり ルソーの自然崇拜に触発されて登攀そのものを楽しみを見出したのはまずスイス人、次にイギリス人でした。キリスト教ヨーロッパには高山を霊峰と呼び、森羅万象に美や霊性を見る東洋のメンタリティはありませんでしたが、それでも啓蒙の 18 世紀になると、先駆的な人たちはキリスト教の世界観はもはや問題解決の前提とはなり得ないことを理解し、自然界を支配する普遍的な法則性が人間存在をも等しく規定していると考えようになります。ルソーの自

然に帰れ」という宣言はその象徴であり、新しい視野を切り開くものでした。

野生の自然が好奇心の対象、観光行動の目的と変じたとき、身近に存在していたのはアルプスであり、山と湖の国スイスでした。スイスはヨーロッパで初めての、そして当時ほとんど唯一の自然美を体現する観光地とみなされたのでした。

ド・ソシュールとモンブラン登頂 近代登山の開祖とされるのがジュネーブの植物学者オラース・ド・ソシュール（1740～99）です。彼はジュネーブ郊外のサレーブ山やレマン湖畔から雪を頂くモンブラン（4,807m）を遠望して育ち、20歳になった年、シャモニーの谷越しにモンブランを正面に見るブレヴァン山に登り、自分もしくは自分の支援によって人類が最高峰のモンブラン登頂を果たすことを科学の名において誓いました。彼自身が様々な探検や調査を試みたほか、頂上への道を発見した者に高額賞金を提示しました。しかし長らく挑戦する者は出ず、彼の誓いから26年を経た1786年、ついにシャモニーのガブリエル・パッカール医師と案内人ジャック・バルマが登頂に成功し、翌年ド・ソシュール自身もバルマのガイドで登頂しました。ド・ソシュールによるモンブラン登頂の成功はヨーロッパ中の話題となり、この時からヨーロッパ・アルプスの高峰への登頂が新しい行動目標となっていきます。

スイスの高山としては、1811年にユングフラウ（4,158m）が登頂され、その後次々と4000メートル級の山々が登頂されていきました。

スポーツとしての登山 初期の登山者はほとんどが地元のスイス人であり、しかも氷河や植生の調査などを目的とした科学者たちでした。スポーツないしレジャーを目的とする登頂のきっかけとなったのは、鉄道が普及しはじめた19世紀中期、

高山のない英国からやってきた法律家アルフレッド・ウィルズによるヴェッターホルンの登頂（3,708m、1845年）とされています。この時から1855年モンテローザ（4,634m）、57年メンヒ（4,099年）、58年アイガー（3,970年）などが登頂され、1865年に最後の難関マッターホルンに英国人の画家ウィンパーが登頂に成功して、アルプス登山の黄金時代は幕を下ろします。この間登頂された140座余に上るアルプスの高峰のうち、約半分の70座が英国人登山家によるものでした。

避暑リゾートの誕生 スイスの山岳地方は、冬は雪に埋もれてしまうので夏が観光シーズンです。ヨーロッパでも夏は暑い。危険と隣り合わせのスポーツ登山はともかく、登山の報道などに刺激されて山と湖の国スイスには19世紀の初頭から次第に避暑客や観光客が現れるようになります。そのほとんどが英国人で、彼らは早くからグランドツアーでイタリアやフランスに長期滞在して旅をする習慣を身につけていましたから、その延長線上に自然観光地スイスをも発見したのでした。ちなみに、スキーの登場は20世紀に入ってからになります。

山岳地スイスに魅せられた英国人は、温泉地と海岸に次いでスイスに理想的な避暑リゾートを見出すことになりました。避暑地コートダジュールのように冬じゅう滞在するほど長期には及びませんでしたから、自ら豪華な別荘を建てることはなく、最初から短期滞在も可能な高級ホテルを発展させることになりました。

ジュネーブで考えたことあれこれ：和魂洋才をめぐって

外国に居住することは誰にとっても全人格的な体験であり、カルチャーショックの体験に事欠きませんが、日本の観光宣伝という作業は、否応なく彼我の文化

や習慣の相違を意識させます。日々の仕事や暮らしの様々な局面で日本文化の特性を感じさせられる日々でした。鳥取県の田舎からフランス文学研究を志して上京し、大学前期にはヨーロッパ文化理解のために日曜日には三宿のカトリック教会に通い、後期にはギリシャ悲劇研究会に所属して古典文学を学んだ私にとって、パリ事務所勤務は夢の実現のひとつであり、憧憬をもってフランスないし西欧に接しました。ジャポニスムにはじまる日本の伝統文化への礼賛は、異質であることの物珍しさくらいにしか考えていませんでした。パリ勤務から帰国した私は、外国と比較して日本を批判する、いうところの「海外出羽守（でわのかみ）」になっていました。物事の決め方やそのための制度について彼我の差を嘆き、有給休暇や観光に係わる発展の在り様については文章も書きました。

少し違った見方をするようになったきっかけは、いまにして思えば自ら提案して行った「在日外国人の日本国内旅行調査」（1979 年）の結果だったという気がします。日本をよく知らない人や一時的な訪日観光客の日本観ではなく、日本に長年住んでいる外国人たちの目に日本はどのように見えているのかを知ろうとした調査でした（シリーズ⑨参照）。調査表の自由記載欄を埋めた彼らの意見感想に正直驚きました。ほぼ全世界に及ぶサンプルの人々が日本と日本人に好意的なコメントを残してくれたことと、その記述振りに驚いたのです。端的に言えば、推薦したいのは、①都市より田舎、②ひとり歩きの勧め、③日常の日本が魅力、④旅館がお勧め、などなどでした。彼らのあるがままの日本への関心は、訪日観光客にも受入れられつつあることは、日本式小旅館（ジャパニーズ・イン）の外客のもてなしぶりと外客の反応からも十分に察せられることでした。餅つきやらお

祭りなどのイベントへの参加やご近所との普段着の付き合いが訪日外客にも喜ばれることを JNTO はよく知っていました。

そして、題名に惹かれて読んでみた平川祐弘「和魂洋才の系譜」（1972 年）は和魂漢才から和魂洋才に至る日本文化の特性を比較文化論的に考察する道筋を示してくれ、ジュネーブ在勤中それと意識しないままに私の中で響いていたのでした。

スピリチュアル・ジャパンからクール・ジャパンへ

パリ在勤中は美術館巡りをし、恥をかく程度に西洋美術史を学びましたが、抽象絵画や幻想芸術系の作品にはなじまないままでした。ジュネーブにきてスイスの歴史を学び、第一次世界大戦の勃発と戦禍がヨーロッパの知識人らの理性と論理に対する信頼を崩壊させ、中立国スイスには反戦主義者や革命家のみならず、多くの芸術家たちも亡命して来ており、ダダイスムの誕生やシュールレアリスムの萌芽もこの頃スイスで起こっていたことを知りました。超現実、幻想、無意識下の不合理を目に見える形で表現するというダリやキリコの絵画を見ていて、キリスト教の教義が示す自然と人間の固定した観念が発想の自由を妨げているのではないかとふと疑いました。

西欧人の人間探求は極限にまで進められてきた一方で、想像の翼を無限定に羽ばたかせたとされる彼らの絵も、既知の物のゆがみやバランス崩しなどがほとんどで、物の怪や霊の世界とは無縁に見え、潜在意識や幻想においてさえ東西で現れるものが違うのだろうかと考えました。

西洋美術史の教えるところでは、西洋絵画に描かれる動物は伝統的に二つだけ、ひとつは「象徴」としての存在（ハトは平和の、犬は貞節の…）、もしくは物語の脇役として居場所を与えられているにすぎないといえます。自然界はすべて人間

の支配下にあり、「神はその姿に似せて人を造り…すべてを支配させることにされた」という教義ゆえでしょうか。

日本には擬人化された動物が自由に踊り（鳥獣戯画など）、屏風絵や掛け軸その他動物を主役とする絵が無数にあり、森羅万象に霊を感じる日本人との感性の相違を感じました。

ありのままの日本への関心 平川の「和魂洋才の系譜」は西欧の先進文明を学んできた経緯と意味を詳細に分析していますが、逆に欧州（外国）人が日本の文化や生活に惹かれたり学んだりする逆方向については言及していません。

パリ事務所で宣伝活動を始めた頃、あなたは柔道をやっているか、空手ややっているかなどと尋ねられることが多く、彼らが柔道や空手に単なるスポーツ競技や体操を超えた日本人のスピリチュアリティを感じていることが窺えました。同じように禅や忍術、生花・茶の湯などの文化にも、自分たちとは異質の、理性と論理を超えたスピリチュアリティの豊かさに憧れている印象をもちました。帰国して幕末・明治以降に滞在した欧米人の日本滞在記や日本見聞記の類を読み漁りました。知的エリートたちの観察だからでしょうか、日本の古いものを恥じて欧風ばかりを尊重する風潮を嘆き、日本人以上に日本的なものを大切に考えてくれる人は、かのベルツ博士をはじめ予想以上に多く、中でも日本の魂の発見者といわれたラフカディオ・ハーンの「怪談・奇談」は驚きをもって読み直しました。

非欧米国から先進国へとまっさきに駆け上がってきた日本の歴史への興味、伝統的な文化や工芸はもとより、日本人の生活や習慣にいたる普段着の日本への関心が1980年代のヨーロッパで明らかに高まっていました。日本は米欧諸国以上に安全・安心で、交通のネットワークは便

利、ホスピタリティに富んだ国民性が報道やJNTOの活動や訪日客を通じて次第に知られるようになっていたからです。

和魂洋才の功罪？ 和魂を強調することは、自らのアイデンティティを喪失しないために必要な精神安定剤だったと思いますが、俗に言えば「建前と本音を使い分ける」ことで折合いをつけている側面があったことは否めません。以下はスイスから帰国後に人様に語った「ではのかみ」の例の一部です。

●私を犯罪者にする気か！ 事務所では必要な物品でも、値の張るものは年度末近くなって予算の余裕をみて購入していました。納品が年度内に（あるいは会計処理上の期限を超えない範囲で）行われることを確認して発注するのですが、時には納品が期限を超えてしまうことがあります。日本の慣習のままに業者に納品書の日付を3月の日付または空欄にしておいてほしいと頼んだところ、「私に文書偽造をさせる気か」とどなられました。約束の納品期限を大きく遅れていると指摘すると、証拠があるかと言われました。口約束は約束にあらず、そんなに重要なことなら文書にするのが当然と言われました。類似の経験はいろいろありました。深夜のガソリンスタンドでの買い物で、係員が自分には領収書を発行する権限がないといって領収書発行を拒否されたこともありました。日本では「契約」といっても場合によっては形式に過ぎず、日付空欄の領収書や上様なる不特定の宛先がまかり通り、これを適当にやりくりして裏金的に使用することだってありました。発注先を決める競争入札で、相見積りと称して同業者名義のより高額の見積書を添付してもらって実質随意契約をしていました。金額だけが問題ではなく、仕事が丁寧で手馴れていれば他社に変更するほうが不合理と思っていました。建

前と本音は別でいい、信頼をベースに仕事をする日本（性善説）と悪意ある行動もあり得るという前提の欧米（性悪説）とをうまく組合せて来たのでしょうか。

●予算より決算… 日本では、物事の決め方がそもそも違っていました。議論するはずの委員会や審議会で、結論は事前の根回しで終わっており、正式会議はセレモニー的決議をもって決まります。団体の総会や株主総会などでの事業報告や決算報告は波乱が起きないように、シナリオ通りにシャンシャンで終わることが最善とされます。国会では質問を事前通告し、役人が書いた回答を棒読みして終わりというのは見慣れた風景です。契約の制度や決定のシステムの表面のみまねて、制度の裏にある理念を無視していると思いました。何らかの事情で建前の方が正義とされると、おろおろし混乱する例は枚挙にいとまがありません。私もこの日本式にとくに疑問を感じていなかったのですが、衝撃を受けたのはスイス観光連盟の総会にオブザーバーとして出席した時の経験です。事業報告と決算報告をめぐって質疑応答が飛び交い、荒れたというほどではありませんでしたが、事業の成果やお金の使い方をめぐってつつこんだ追求が行われていました。会長だったか事務局長だったか、パーティでの懇談でやっと1年間の任務と責任から解放されたと実にホッとした顔をしていました。事業計画や予算は大まかに決められ、幹部が創意工夫によって最大の効果が得られるように執行する責務を負っているからです。予算よりは決算、予定よりは結果、フリーハンドを与えて結果を評価する方が合理的のように思えたのでした。

本部に復帰：現場から管理職へ

5年間の勤務を終えて帰任は年明けの1987年2月と決まり、長男の高校入試が

あるため、12月中旬に家族は一足先に帰国しました。クリスマス休暇にはジャルパック・ジュネーブの在住日本人向けトルコ行きパッケージツアーに参加し、イスタンブール、アンカラ、カッパドキアなどをめぐりました。添乗員と通訳ガイド付きの周遊型パッケージツアーに参加したのはこれが初めてで、私にとって貴重な体験となりました。

ジュネーブでは日本の観光代表として広報・渉外活動に努め、セミナーや展示会は自分たちで設営・アテンドするのはもちろん、予算がなくて自分でトラックをレンタルして展示物を運送するような現場仕事を満喫し、1987年2月に本部に復帰しました。後任はパリ事務所次長も引き継いでくれた田中五十一さんでした。

帰国後のポジションは観光宣伝担当の事業第一部の次長でした。部長は浜野秀夫さん、担当理事は岩田光正さん。事業第一部は私の留守中の1985年の組織改正で新設された部でした。それまで運輸省が行ってきた「通訳案内業（ガイド）試験」の実務をJNTOが受託代行するにあたり、海外観光宣伝業務を担当してきた事業部と編集部を統合して事業第一部とし、外客受け入れ体制整備事業（ガイド試験実施を含む）と日本人海外旅行者対策事業を合わせて事業第二部としたのでした。事業第一部の旧編集部の事業を統括する次長として海藤馨さんがおられ、私は海外宣伝担当の次長となり、JNTOが企画と運営を受託した豪州ブリスベン市で1988年に開催予定のレジャー博覧会の日本ブース設営の準備事務局長を兼務しました。企画調査部と国際協力部（コンベンション誘致事業を含む）はそのまま、管理部門の総務部、経理部と合わせて本部は6部体制となっていました。

帰任した時点で私は50歳になっており、定年まで残り10年、観光研究の道に進むこ

とを決意していました。先走って言うと、2年後の1989年4月、浜野部長の定年退職によって事業第一部長に昇格し、1992年に総務部長、1993年に役員（理事）になりました。

実務を離れて管理職になったことで経験の幅が広がり、知見が質量ともに増える一方で、特殊法人の管理職の息苦しさも覚えるようになりました。もともと特殊法人日本観光協会時代のJNTOに入社して以来、仕事の意義と面白さに惹かれて自分なりに努力してきましたが、組織内で昇進したいという希望はもっていませんでした。理事は一期2年で1995年7月に退任し、財団法人国際観光センター専務理事に転出しました。

その間のJNTOの状況と内側にいた自分の行動を振り返ってみます。

JNTOをとりまく状況

1970年代と80年代は日本経済が黄金期から絶頂期を迎えた時期で、有り余る黒字で円は高騰していました。状況はアウトバウンドに有利で日本人の海外旅行は増大一途、黒字減らしの要請と途上国援助の一環と認識されてアウトバンドが奨励され、1987年には運輸省が海外旅行倍增計画（テンミリオン計画）を発表しました。1986年の海外旅行者数552万人を5年で倍增させようという計画です。同じ1987年に観光分野の国際協力のための組織として運輸省が財団法人国際観光開発研究センター（ITDIJ）を設立して途上国の観光開発に協力する体制を整えました。ちなみにテンミリオン計画は3年後の1990年に1千万人の大台を超え、目標年を待たずに到達しました。

他方、インバウンドは外貨獲得という促進理由を失って政府補助金が激減しただけでなく、JNTO無用論まで出てくる状況でした。私たちも論理をたてて防戦

しましたが、支持者もあり、1993年7月16日の読売新聞「論点」でハーバード大学オリバー・オールドマン法学部教授がJNTOの事業縮小、削減の対象とされていることに強く反対する旨の投稿をしてくれたことは嬉しく思いました。

私も帰国後しばらく「低迷するインバウンド」、「出力の落ちたJNTO」という感覚を免れずにいましたが、それが間違いであることにすぐに気がつきました。

1) 近隣諸国の訪日市場の拡大

80年代初頭から90年代にかけての大きな変化の第一は近隣アジア諸国が訪日観光市場として登場してきたことです。OECDが台湾、韓国、香港、シンガポールをアジアのNIES（新興工業経済地域）と呼んだ（1979年）ように、これら諸国を中心に近隣国からの訪日客が急増していました。1980年の訪日外客132万人のうち、国籍別ではアメリカがトップで32万人でしたが、2位の台湾と3位の韓国を合わせるとすでにアメリカを抜いて37万人に達していました。翌1981年には地域別入国者数でもアジア中近東（48.9%）が初めて北米＋欧州（45.3%）を上回り、この傾向は年を追って急速に進み、1989年には国籍別でも韓国がアメリカを抜いてトップに立ちます。この間JNTOは1984年に台北（国交の関係で日本観光協会名義）、1985年にはソウルに観光宣伝事務所を設置して活動を強化しています。訪日客といえば米欧人ときまっていた1970年までとはフェーズが変わりました。将来はアセアン諸国や中国も参入するであろうことが十分予想されました。

近隣諸国からの訪日観光客が増えることは地方への観光客の増大を意味し、国際航空路線の地方空港への拡大と海路客の増加と相まって、むしろ外客増のペースは上がっていました。運輸省はこうした状況を踏まえて1985年に外客の一人

歩きできる環境の整備と地方への外客誘引を目的に「国際観光モデル地区」の制度を発足させています。1986年3月までに札幌・支笏湖から南部沖縄地区まで15地区を指定し、最終的には39県42地区が指定されました。自治体の中には直接対外観光宣伝を実施する県なども出てきて、JNTOは海外事務所の機能を活用し、宣伝資料やノウハウを提供して積極的に支援しました。とくに台湾、香港、韓国では国際旅行見本市が毎年開催されており、JNTOは地方自治体や観光業界とともに共同参加していました。国庫補助金は減少一途でしたが、地方自治体や業界の出力を含む全体的な日本観光の露出力はむしろ大幅にアップしていたといえるでしょう。金がなければ金のかからない宣伝手法を考え、補助金に頼らない非補助対象事業を次々に考案して宣伝活動を活発化していきました。

本部主催事業 国際観光宣伝の現場は海外であり、本部は事務所活動のための兵站部として機能し、宣伝資料や観光情報の供給、事務所からの要請に応じて支援協力するのが仕事です。そうした中で以前から行っていたASTAやPATAや巡回観光セミナーなどに加え、本部が地方自治体や観光関連業界に共同参加を呼びかけて参加する主要市場の観光見本市参加などの本部主催事業(非補助対象)が急増していました。これら共同事業の担当責任者として世界各地に出張する機会を与えられたほか、在職中様々な用件で諸外国を訪問する機会を得て観光研究者として研鑽を積むことができました。

2) 国際理解と親善の増進のために

1980～90年代の日本のインバウンドは量の拡大よりも市民レベルの国際交流による国際理解と親善の促進に力点を置くように変わっていました。

当時のJNTOの予算には、自分で集めた賛助金を使用して他者と行なう「共同事業費」という費目と他者の委託によって行う「受託事業費」という費目があり、両費目を活用して非補助対象事業を拡大していましたから、海外事務所も本部も大いに多忙でした。共同事業は上述の通りですが、従来の対外観光宣伝とは違ったタイプのユニークな三つの受託事業について報告しておきます。

●青少年エッセイ・コンテスト事業

1984年度から、主要市場国の青少年に日本に関するエッセイを書いてもらい、入賞者を日本に招待するという事業が始まっていました。運輸省のあっせんにより受託した日本船舶振興財団の国際交流資金による事業でした。初年度は米英仏の3国から2名ずつ計6名を招請という規模でしたが、1986年度には韓国、カナダ、オーストラリアを加えて6か国12名を招請し、1987年度からは毎年1か国を選んで20名の青少年を招請する事業へと拡大しました。1987年度は英国を対象とし、My Perceptions of Japanをテーマにロンドン事務所が現地メディアと協力してエッセイを募集しました。286名の応募者から20名を選抜し、彼らを日本観光に招請して訪問記を協力メディアに掲載してもらいました。滞在中に日本人青少年との交流や工場見学、ホームステイなども体験させ、東京では竹下首相、石原運輸大臣などを表敬訪問しました。その後同じ方法で国を変えて実施し、88年度にオーストラリア、89年度カナダ、90年度ソ連、91年度韓国、などと続けました。私も担当部長として首相表敬、運輸大臣表敬、笹川会長表敬などに同行しました。

とくに印象に残っているのはゴルバチョフ時代のソ連を対象に選んだことです。ソ連を選ぶことになったきっかけは、1990年9月に日本船舶振興会が日ソ貿易協

会とタイアップしてソ連の経済開発を支援する目的で「極東シベリア経済視察団」を送ることになったことでした。私はこの使節団に観光専門家として参加し、日本船舶振興財団のエッセイ・コンテスト担当の柴崎治生氏も一緒に、この機会に実施方法等を話題にしたと記憶しています。ソ連に JNTO 事務所はないので、10 月に担当の井久保敏信さんと二人でモスクワに出張し、「モスクワ・ビジネス誌」に選抜を委託しました。

年が明けて 1991 年 1 月 25 日ノーボスチ通信社本社で行われた授賞式には私と柴崎氏が出席しました。私はそのあと日本観光展の代表としてパリとロンドンに向かい、柴崎氏が 20 名の当選者を連れて訪日しました。感性豊かな青少年を日本観光に招請するというこの事業は真に有意義であり、JNTO 予算では実施不能でしたから熱が入りました。

● Make Friends for Japan

世界に広く日本の友達を作ろうという趣旨のこのキャンペーンは JNTO の内部からの発案で、日本人海外旅行者が 600 万人に達することを踏まえ、海外に出かける日本人にも国際親善に役立ってもらおうという趣旨の事業です。北出明さんらが中心となって企画し、運輸省、外務省、フジサンケイグループなどの支援を得て賛助者を募り、中核の事業として Make Friends for Japan と題する冊子を大量に作成して日本人海外旅行者に配布しました。副題は「パスポート副読本：あなたは今日から民間外交官」としました。冊子の内容は 2 部に分かれ、第 1 部は日本紹介の助けになる情報（日英併記）を載せ、第 2 部は日本人旅行者にとって有用な情報を取りまとめたものでした。とくに第 1 部には日本の平均的なサラリーマン家庭の紹介を加えて普段着の日本人をも紹介しました。1987 年 8 月 1 日の観光週間の

初日に成田空港を出発する日本人旅行者への配布をもってスタートさせました。

ほかに彼らが外国で知り合った人に日本の観光パンフレットの送付を希望する人がいれば、その人の住所あてに担当地域の JNTO 事務所がパンフレット一式を送付するというアフターサービスをつけました。その後冊子の配布はすべての出発空港や都道府県のパスポート発給窓口でも配布されるようになり、国内外に大いなる反響を呼びました。1992 年版からは「ハロー・ジャパン」と名前を変えてかなり長期に続きました。お金をかけずに JNTO のノウハウを生かした素晴らしい事業でした。

●在日外国プレス経由の地方の観光紹介

以前から在日特派員と個別に協力することは多々ありましたが、メディア担当だった谷口せい子さんの発案で、当時有楽町電気ビル 20 階にあった日本外国特派員協会（FCCJ）の場を借りて地方の観光を紹介する「～県の夕」を企画して県に呼びかけました。新任の担当理事伊木常昭氏（日本航空出身）が FCCJ の個人賛助会員で積極的に関わってもらいました。

この事業は公式の記録がなく詳細が不明ですが、1990 年の第 1 回は KAGAWA Night とし、香川県産の食材によるディナーの提供、伝統芸能の披露、県の名産品を提供するくじ引き（特賞として取材旅行招待）などを行い、県側にも特派員にも好評で、取材記事も大きく報道されました。記録がなく不確かですが、メモによると静岡県、岐阜県、石川県、沖縄県などの夕べも実施されたようです。（続く）

今回は国際観光モデル地区制度の主眼であった外客受入れ体制改善の事業と JNTO が蓄積してきた知識と経験を生かした国際観光交流における幅広い活動を取り上げます。

2023 年 10 月 19 日